63　道教と中国医学（第24回）『太上感応篇』

吉元昭治

『太上感応篇』（以下『感応篇』という）は、『功適格』『文昌帝君陰隲文』『関聖帝君覚世真経』などと共に善書（勧善書）の一つであるが、その成立は最も古い。北宋徽宗頃にはすでにあったというが、その著者についてはいろいろな説があり『正統道蔵』中には、李昌齢伝、鄭清立賛とある。李昌齢については同名異人があり、一人は『宋史』にもでてくる太平興国三年（九七八）進士になった人で、もう一人は南宋理宗頃の四川省の隠士という人物で、本書は歴代皇帝の欽定もあって十二世紀には広く拡っていった。

さて、本書は全文一二七七字からなる短かいものであるが、その要旨は善行すれば長生でき、悪行を重ねると短命に終るというものである。すでに『周易、坤』に「積善之家、必有余慶、積不善之家、必有余殃」とあり、道徳基準の一つ、人々の心の持ちようをいっていた。道教経典の一つ『太平経』を貫く思想の中に「承負」がある。いわゆる「親の因果が子に報い」で、親や先代の善行が子孫の繁栄、家門隆盛を招くが、反対の悪行は子孫に影響を及ぼし遂には家門滅亡になるという。この承負説は『感応篇』の大きな柱になっている。しかし最も大きな存在は『抱朴子、内篇』第三対俗、第六微盲篇であろう。対俗篇では「地仙を欲せば当に三百善を立つべし、天仙を欲せば千二百善（『感応篇』では千三百善）を立つべし」とあり、もし千九百九十九で悪行を行ったら初めからやり直せと書いている。ここは『感応篇』にもあるが、両者の違いは、『抱朴子』では善行を勧める他に、仙人の域に達するには、金丹、仙薬、登渉、論仙などの諸篇が示すような努力目標があるが、本書ではあくまで善行の積み重ねによって長生が可能であるとしている。次に『感応篇』の内容に入ってみよう。

文初は「太上曰く、禍福に門なし、ただ人自ら召す。善悪の報いは影の形に従うが如し」という名文となって

いる。ついで天人合一思想から天は人々を看視し、北斗の神君は天の頭上から照覧し、その悪行により紀（三百日）と算（三日）をその命から減じるという。また三尸の神が身中にあり庚申の日には天にその罪過を報告し、月晦の日には竈の神も同様である（『抱朴子』では算紀を奪うとある）。そこで長生を求めんとすれば須らくこれを避くべしといっている。このような総論的な事項の次には善行と悪行の細かい注意を並べている。本書の文章は文言がつづいているのでその区切りが難かしいが、演者の算えたところ善行は十六、悪行は六十九であった。悪行が数多いことはそのまま人々に注意をよびかけているようである。

ついで晦日、大晦日に騒いだり、元日に大きな声を出しどなる、北に向って唾をはいたり、放尿したり、亀を侮辱したり、用いる火には用心し、季節の変り目には刑を行わない。流星や虹を指さしたり日月を長く見つめたり、北に向って悪口をいう、亀蛇（北方のシンボル）を殺してはいけないなどと記している。ここの部分は古くからある中国の民俗習慣にも関わっている。もしこれらの所行を重ねると司令の神はその軽重により紀と算を奪うが、算がつきれば死に到り、その余りは子孫にまで過が及ぶといっている。

結論の部分では善行の心がおこれば吉神が、悪行の心がおこれば凶神がこれを見ている。だから「諸悪莫作、衆善奉行」という言葉があり、善行すれば禍を転じて福になし、一日に三善すれば三年たてば福が、一日に三悪すれば三年で天は必ず禍を降すとあり「胡不勉而行之」という言葉で終っている。

『正統道蔵』では「感応篇」があるが、その他『道蔵輯要』には六種、『蔵外道書』では九種の『感応篇』及びその集註、図説などがある。

総会ではこれら道蔵関係の目録や、演者の所持する感応篇類などについて供覧したい。

（吉元医院）